

白河天皇 成菩提院陵鳥居改築工事に伴う立会調査

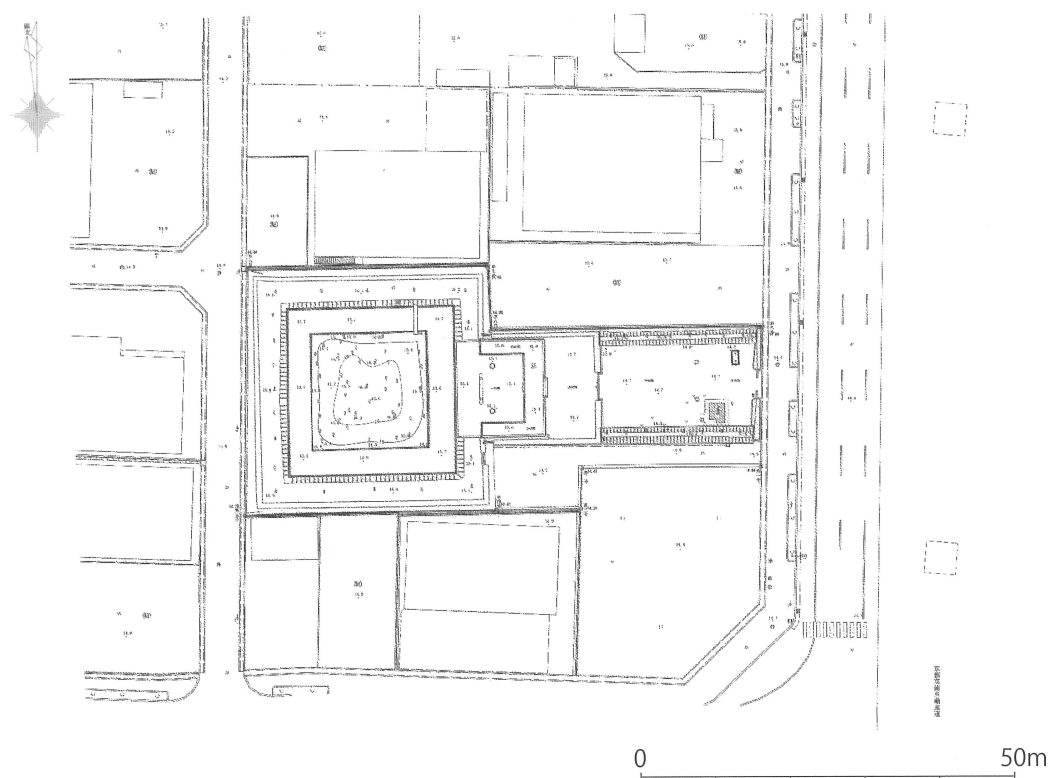
第72代白河天皇の成菩提院陵は、近畿日本鉄道（近鉄）京都線・京都市営地下鉄烏丸線の竹田駅からは南西へおよそ700 m、名神高速道路京都南インターからは南南東へおよそ420 m、第二京阪道路の開通によって面目を一新した油小路通と新城南宮道との交差点の北西、京都府京都市伏見区竹田浄菩提院町に所在しており、桃山陵墓監区深草部が管理にあたっている。周辺は都市化が進んでいるが、鴨川と桂川の合流点に近く、かつては氾濫原である平地に自然堤防による微高地や低地である後背湿地が点在していたものと推測される。

当陵の敷地は、「周知の埋蔵文化財包蔵地」である「鳥羽離宮跡」及び「鳥羽遺跡」に含まれている⁽¹⁾。当陵の周囲には、第74代鳥羽天皇の安楽壽院陵、第76代近衛天皇の安楽壽院南陵をはじめ、安楽壽院、北向不動院、城南宮などが所在しているが、当陵を含め、これらはいずれも白河天皇が造営を始めた鳥羽離宮（鳥羽殿）に由来するものである。

白河天皇は、院政の開始者として知られているが、応徳3年（1086）に決行された子・堀河天皇への譲位は、皇位を弟たちではなく、自身の子孫に継がせることが目的であったとされ、上皇の絶大な権力は、摂関家の代替わりによる混乱、堀河天皇の早世、それに伴う幼帝・鳥羽天皇の即位、その鳥羽天皇の外戚が摂関家ではなかったことなどの事象が積み重なっていった結果、確立されていったものとされる。

法皇（嘉保3年（1096）に出家）は、自身の追号には鴨東・白河の地を選んだが、城南・鳥羽の地の開発にも並々ならぬ情熱を注いでおり、鳥羽南殿を皮切りに、同北殿、同馬場殿、同泉殿、同東殿、同田中殿などを続々と整備した。これらの殿舎群の総称が「鳥羽離宮」あるいは「鳥羽殿」である。法皇は、嘉承3年（1108）6月3日、鳥羽東殿近くに自身の陵所とするべき塔の建立地を選定し、翌天仁2年（1109）8月18日に三重塔が落慶した。それから20年後の大治4年（1129）7月7日、法皇は三条北鳥丸西の三条西殿（三条室町殿）にて崩御し、15日に「香隆寺乾野」⁽²⁾、「高隆寺西北野」にて火葬された⁽³⁾。翌日、御遺骨は、生前から用意されていた金銅壺に納められたが、鳥羽の方向である南方が凶方であったため、先述の塔ではなく、火葬所に近い香隆寺に安置された。天承元年（1131）7月8日、三重塔の傍らに法皇終焉の地である三条西殿の西対屋を移築した阿弥陀堂が完成し（成菩提院）、翌日、塔下の「石簡」内に御遺骨が納められた⁽⁴⁾。その後、久安5年（1149）2月25日の第76代近衛天皇の元服奉告、寿永2年（1183）6月21日の第81代安德天皇による兵乱鎮定祈願、建長元年（1249）4月23日の後嵯峨上皇による天変火災奉告、文永元年（1264）8月9日の同じく後嵯峨上皇による天変奉告などで山陵使が発遣されたが、成菩提院の退転により陵の所伝も失われた。元禄の諸陵探索・結垣事業では、現在の白河天皇陵を近衛天皇陵に、現在の鳥羽天皇陵を白河天皇陵に、現在の近衛天皇陵を鳥羽天皇陵にそれぞれ当てている⁽⁵⁾。その後、蒲生君平の『山陵志』⁽⁶⁾を始め、3陵の比定を現状のように考える説が優勢となり、「幕末の修陵」時に現状のように決定された。幕末の修陵以前は、「塔ノ堀」と呼ばれていた水田の中に「陵」あるいは「塔壇」と呼ばれていた高さ約1.2 mの方形の高まりがあり、これが三重塔の基壇と想定されること、「塔ノ堀」の西に字「成菩提院」があることが根拠とされている⁽⁷⁾。幕末の修陵によって、「塔壇」の周囲に堀をうがち、堤が造成された⁽⁸⁾。現状の墳塋は、一辺約16 m、堀底からの高さ約3 mの方丘で、四周に幅3～3.5 mの堀を巡らす（第28図）。なお、当陵隣接地で行われた鳥羽離宮跡第91次、96次、121次、122次の各調査により、三重塔建立当初に周囲を巡っていた濠が発見されている。これにより、往時には三重塔を中心とする一辺約55 mの方形区画があり、その周囲を、幅およそ8.5 m、深さ1.6 mの濠が巡っていたこと、濠の内側（塔側）には自然石による石垣が築かれていたことが判明した⁽⁹⁾。

当陵における調査事例としては、昭和50年に実施した水道取設工事に伴う立会調査⁽¹⁰⁾、昭和55年に実施した駐車場整備予定箇所の事前調査⁽¹¹⁾、昭和57年に実施した鳥居建替工事に伴う立会調査⁽¹²⁾、昭和58年に実施した見張所雨落改修・掃除口改修・駐車場整備・外構柵設置等工事に伴う立会調査⁽¹³⁾、昭和59年に実



第28図 成菩提院陵 陵基地形図(1/1,000)

施した濠堤掃除口改修工事に伴う立会調査⁽¹⁴⁾がある。今回の調査は、昭和 57 年に建てた木造鳥居が老朽化し、改築することになったため、実施したものである。

今回の鳥居改築工事の工期は令和 5 年 12 月 20 日～6 年 3 月 29 日で、陵墓課の有馬伸と桃山陵墓監区事務所の妹尾吉紹、田邊雄貴の立ち会いの下で 1 月 15 日に掘削を開始し、既存基礎の撤去が終わって完掘したのち、19 日まで記録化作業を行った⁽¹⁵⁾。また、新規基礎の設置が完了後の 6 年 2 月 8 日には周囲の埋め戻しが行われたため、監区職員が立ち会い、排土中に遺物が含まれていないかの確認に努めた。

なお、有馬滞在中の 1 月 19 日には、歴史学・考古学関係 16 学・協会の代表者に現場を公開した。

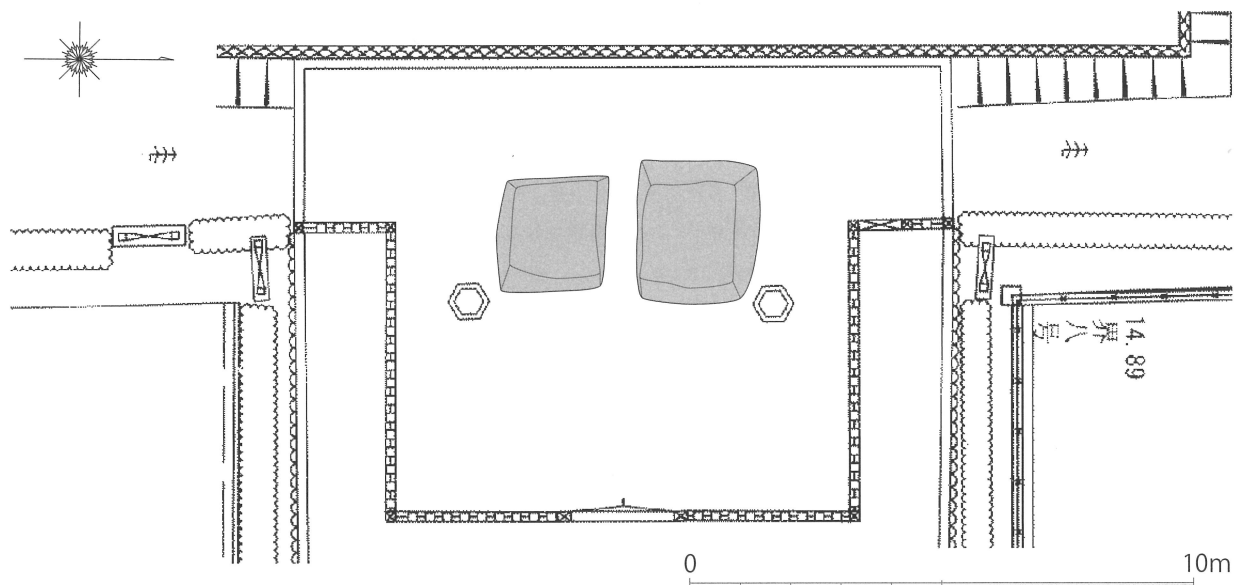
今回の掘削箇所は、既存基礎の撤去を伴ったことから、既存基礎よりも一回り大きくなり、北側のものが長さ・幅ともおよそ 2.5 m、南側のものが長さ・幅ともおよそ 2.1 m、深さは双方ともおよそ 1.4 m となった（第 29 図、図版 50）。

今回の掘削箇所での土層は、その性格から大きく 6 層に大別できる（第 30 図）。Ⅰ層は、拝所内に敷き詰められた白砂の層である。Ⅱ層は、先代以前の鳥居など、拝所造成以降に設置された工作物の設置・撤去に関わるものや、拝所の整地に関わる土層である。Ⅲ層は拝所そのものの造成土。Ⅳ層は拝所造成前に堆積したと判断される砂層である。Ⅴ層は耕作など人為的改変を受けていると思われる層、Ⅵ層は地山と考えられる。Ⅳ層の砂層は、近年まで耕作地であった現在の駐車場敷地での調査では相当する層が確認されていないこと⁽¹⁶⁾、Ⅳ層に覆われるⅤ層の上部は有機物に由来すると思われる暗褐色土であること、当陵の拝所は「幕末の修陵」時に周囲より 1 段高く造成されていると思われることから⁽¹⁷⁾、「幕末の修陵」直前に発生した河川氾濫による洪水堆積層である可能性が高い。

遺物は、瓦片など 13 点が出土しているが、多くは後世のもので、中世に遡りうるものは 1 点のみである。

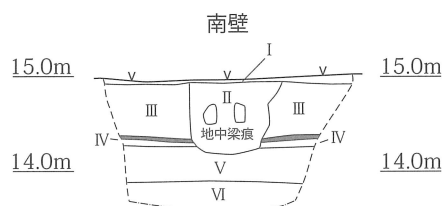
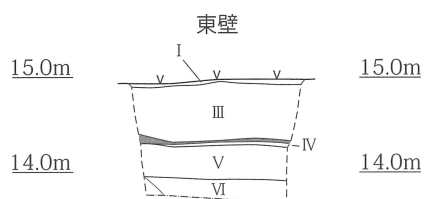
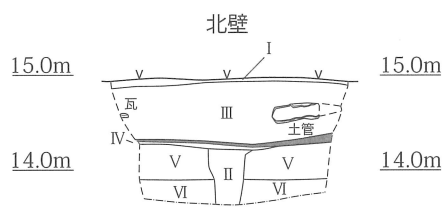
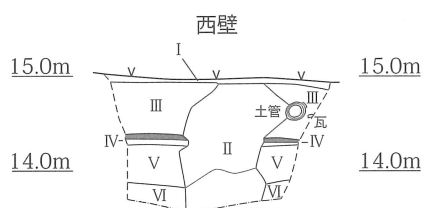
以上、今回の掘削箇所においては保存すべき遺構は確認されず、工事は予定どおり施工された。

（有馬 伸）

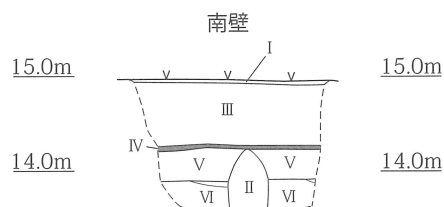
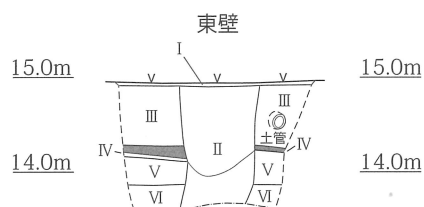
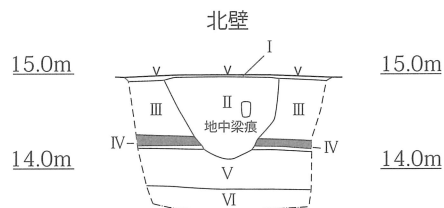
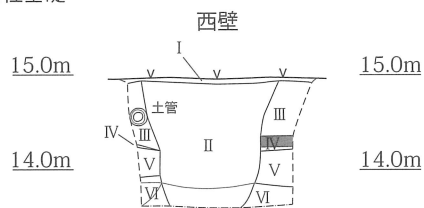


第29図 成菩提院陵 掘削箇所位置図(1/150)

北柱基礎



南柱基礎



0 5 m

※ IV層中の網掛けは砂層である。

第30図 成菩提院陵 掘削箇所断面図(1/80)

註

- (1) 京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課「京都市遺跡地図提供システム」
<http://keikan-gis.city.kyoto.lg.jp/kyotogis/iseki/main>
- (2) 藤原宗忠「中右記」大治4年7月15日条(増補「史料大成」刊行会編『増補史料大成』第14巻「中右記」六、臨川書店、1965年)
- (3) 源 師時「長秋記」大治4年7月15日条(増補「史料大成」刊行会編『増補史料大成』第16巻「長秋記」一、臨川書店、1965年)。
なお、上記史料中の「高隆寺」は同じ音の「香隆寺」のことと解釈される。
- (4) 源 師時「長秋記」天承元年7月9日条、前掲註(3)書。
- (5) 細井知慎(広沢)「諸陵周垣成就記」(有馬祐政編『勤王文庫』第參編 山陵記集、1922年)。
- (6) 蒲生秀実(君平)「山陵志」(安藤英男『蒲生君平 山陵志』、りくえつ、1979年)。
- (7) 谷森善臣「山陵考」(外池昇編『文久山陵図』、新人物往来社、2005年)。
- (8) 鶴澤探眞「白河帝 浄菩提院陵 荒蕪」／「白河帝 成菩提院陵 成功」(外池昇編『文久山陵図』、前掲註(7)書)。
- (9) 前田義明・堀内明博「第91次調査」財団法人京都市埋蔵文化財研究所『鳥羽離宮跡発掘調査概報』昭和58年度、京都市文化観光局、1983年。
堀内明博・前田義明「第96次調査」財団法人京都市埋蔵文化財研究所『鳥羽離宮跡発掘調査概報』昭和59年度、京都市文化観光局、1984年。
前田義明「第121次調査」財団法人京都市埋蔵文化財研究所『鳥羽離宮跡発掘調査概報』昭和61年度、京都市文化観光局、1988年。
磯部 勝・鈴木久男・前田義明「第122次調査」財団法人京都市埋蔵文化財研究所『鳥羽離宮跡発掘調査概報』昭和62年度、京都市文化観光局、1988年。
- (10) 本件は、軽微なものであったため、『書陵部紀要』の「陵墓調査関係概要」では触れられていない。
担当者：山田辨治(当時深草部守長)・奥田佳久(当時成菩提院陵担任者)
実施日：昭和50年7月18日
掘削箇所：配水管埋設箇所(参道入口を西へ→生垣沿いを南へ→小土堤沿いを西へ→見張所西側を北へ)
長さ：12.5m、幅：0.3m、深さ：0.4m
排水管理埋設箇所(見張所西から北東へ→既存排水枡)
長さ：2.5m、幅：0.3m、深さ0.4m
所見：表土下は茶褐色砂礫層で、陵墓整備に伴う盛土と思われる。
出土品：なし。
- (11) 福尾正彦「成菩提院陵駐車場整備工事区域の事前調査」『書陵部紀要』第33号、宮内庁書陵部、1982年。
- (12) 舟瀬利昭・福尾正彦「成菩提院陵鳥居建替工事箇所の調査」『書陵部紀要』第35号、宮内庁書陵部、1984年。
- (13) 石田茂輔「昭和58年度陵墓調査関係概要 調査の全容」『書陵部紀要』第36号、宮内庁書陵部、1985年。
- (14) 註(13)に同じ。
- (15) 本件調査に関しては、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課・熊井亮介氏に現地を検分していただき、種々のご教示を賜った。記して感謝の意を表したい。
- (16) 註(12)に同じ。
- (17) 註(8)に同じ。



1 北柱基礎 西壁（東から）



2 北柱基礎 北壁（南から）



3 北柱基礎 東壁（西から）



4 北柱基礎 南壁（北から）



5 南柱基礎 西壁（東から）



6 南柱基礎 北壁（南から）



7 南柱基礎 東壁（西から）



8 南柱基礎 南壁（北から）